

上田 勉

こちらでは、ツツジの花が咲き始めました。今回は、東北の歴史です。

#### 4百年前、西欧との懸け橋となった日本人がいた

1873年欧米を歴訪した岩倉具視使節団は、イタリアである書状を見て驚愕しました。17世紀初頭に、ローマ教皇とスペイン国王に謁見した日本人がいたことに。そして、日本にも大航海時代があったことに。その日本人の名は支倉（はせくら）常長。

常長は伊達政宗の家臣として、共に豊臣秀吉の朝鮮征伐に出陣しました。（今で言うところの集団的自衛権の行使）

そして、今から401年前、石巻市の土浦という入り江から1隻のガレオン船（サン・ファン・パウティスタ号、日本で建造した帆船）が出航しました。乗り組んだのは、仙台藩士の支倉常長他、宣教師ルイス・ソテロ率いる約30人の使節団や多くの商人ら約180人。のちに「慶長遣欧使節」と呼ばれる一団です。政宗が一行に与えた使命は、ヨーロッパに渡ってスペイン国王にメキシコとの直接貿易の許可を得ること。さらに、仙台藩のキリスト教布教のため宣教師の派遣を願うことでした。

常長一行が、アカプルコ（メキシコ）を経由して、スペインにたどり着いたのは1614年2月、ここで国王フェリペ三世に謁見して、政宗の親書を手渡します。そして、常長は翌年12月洗礼を受けます。「ドン・フィリップ・フランシスコ・ファシクラ・ロクエモン」それが常長の洗礼名です。そして1615年11月3日、ついに常長はキリスト教の頂点にいるローマ教皇パウロ五世に謁見。月浦を出港して早や2年が経っていました。

粘り強くスペインとの貿易交渉に当たった常長でしたが、大きな成果が無く、1617年7月失意の中で帰国の途に。アカプルコから再びサン・ファン号に乗った常長一行は、マニラ（フィリピン）を経て、長崎そして仙台へ帰ってきました。

#### 慶長遣欧使節の帰国—江戸幕府と仙台藩のキリシタン弾圧始まる

常長は政宗に遣欧使節の報告をしますが、仙台藩の日記には書かれていません。既に江戸幕府はキリシタン禁止令を布告、政宗もそれに従います。江戸幕府と仙台藩は、遣欧使節のことを封印、その後一切世に知られることはありませんでした。（私は驚愕しました。江戸時代にも特定秘密保護法があったことに）。

常長は1621年（22年の説もあり）に死亡。殉死か病死なのかも分かっていません。常長の子常頼及び家扶3人は、キリシタンであるために処刑。支倉家も改易（お家断絶、後に復興される）。同行した宣教師ルイス・ソテロは、フィリピンから日本へ布教のために密航するが、逮捕されて火刑に処されました。鎖国とキリシタン弾圧によって、江戸時代の世界時間は停まってしまいました。常長一行が月浦を出航する2年前（1611年10月28日）に、慶長の大津波が三陸地方を襲います（溺死者1,738人）。被災地の復興と被災者の救済のために、そのために西欧の文化や科学技術を学ぶために、常長はあらゆる苦難を乗り越えて西欧へ渡ったと、私は信じたいです。

【慶長遣欧使節が出航した月浦港—津波で大きな被害を受けた（石巻市牡鹿半島）】



【復元されたサン・ファン・パウティスタ号（石巻市慶長使節船ミュージアム）】

